

青年期における自己概念と適応

丸 島 令 子

Summary

Anxiety and Development of Self-Concept in Japanese University Students

Reiko Marushima

ABSTRACT: The study aimed to examine the factors affecting the development of self-concept, an indicator of ego-identity, among students, and investigated the relation between self-concept and psychological adaptation. Subjects (505 men; 523 women) were students of 4 private universities in Tokyo ranging in age from 18 to 28. Their mean age was 19.7 years ($SD=1.37$).

Self-concept was measured by the semantic differential scale developed by Monge (1973). The scale is comprised of the following components: achievement/leadership, congeniality/sociability, adjustment, and masculinity/femininity. Psychological adaptation was measured by using the Cattell-Scheier (1957) anxiety scale questionnaire.

The structure of self-concept had substantially the same factors as Monge, except for masculinity/femininity. All the variables except sex difference influenced the total score for self-concept. In the subscales for self-concept, all the variables except family structure affected "adjustment". However, financial situation, type of university and sex caused differences in "sociability/congeniality", and financial situation, family structure and sex caused significant differences in "achievement/leadership". "Adjustment" affected anxiety most strongly. The two subscales of "adjustment" and "leadership/achievement" affected anxiety indirectly via "adjustment" and "leadership/achievement".

問題と目的

思春期後期から青年期に達した頃、人は今までとは違った質的に新しい精神生活を持つとみられている (Blos, P., 1962)。青年は思春期の混乱から抜け出たと思い、主観的には自分がもはや子供時代とは違う人間であることを悟り、内的、外的体験の調和を感じる。これはエリクソン (Erikson, E.H., 1956) が「自己同一性」とよんだ主観的自己体験であり、それは比較的安定していて、思考や行動の基礎として現実検討、現実的自己評価などに影響を及ぼすものと考えられており、「自己概念」ともよばれている。

青年がこのような感覚をもつに至るのは、乳幼児期からの個人的欲求や能力 (心理) と社会的期待や要求 (社会) との相互作用の所産として発達させてきた過程によるものであり、エリクソンはこれを「心理社会的理論」(psychosocial development) として概念化した。またその理論は、乳児から老年に至までの生涯を通じて発達が持続するものと指摘された点が注目されている。

ニューマン夫妻は、このような人間の生涯的な発達の研究を押し進め、青年期を二つの段階に分け、初期は急激な身体的変化、重要な概念的成熟、仲間からの承認などに最も関心をもつ時期として特徴づけられ、後期は家族からの自立と個人的同一性の発達によって特徴づけられると考えた。(Newman P. M., Newman, P. R., 1975, 1981.)。

以上のような“自分とは何か”についての発見や“自分自身の確信”ともいえる「自己概念」の発達や「同一性」の問題は、青年期における最も重要な発達課題とみなされている。しかしながら、それとは裏腹に自分を見失い、混乱して行き、発達課題を見離して危機状態に立たされる青年も多い。このような青年の心理的な適応の状況を、病理学的な現象としては「モラトリウム人間」(小此木, 1979)「スチューデント・アパシー」「登校拒否」といわれて、わが国でも社会的に問題視されている。

それでも大多数の青年は混乱の過程を経てやがて自己洞察や環境の助けなどによって、危険を解決して行く。このような解決の過程において、自己概念を形成することや、高い自己評価の意識をもつことが重要であり、逆に解決に失敗し、自己概念の認知に一層の混乱をきたした場合、強い不安や神経症傾向がもたらされ、不適応におちいるということが実証的研究によっても報告されている (Lobel, T.E. & Winch, G. L., 1988)。

このように一人の成人となる人間の成長にとって自己概念の認知は重要な機能をもっていると考えられる。ところが、自己概念の把握や概念規定は簡単ではない。例えば、「自己 (self)」とともに「自我 (ego)」や「同一性 (identity)」の用語がしばしば用いられるが、それらの意味するところはそれぞれどのように異なるのか、あるいは重なり合うのか、その見解は一様ではない。こうした問題を踏まえて、一般的には、自己概念とは自分自身を客体としてみた「意識的認知像」をさす心理学的概念であると解釈される。ロジャース (Rogers, C.R., 1951) は、

彼の臨床経験をとうして「現象的自己」という自己概念を提示した。それによると「人は自分を中心であるところの不断に変化する経験世界に生きている」という命題のもとに、そのような経験世界で意識され、知覚された自己の部分が個人にとっての實在に他ならないと見なされている。したがって、心理療法において「治療者は患者を広い視野の中で人間像をとらえ、彼の自己概念と現在の経験（ありのままの感覚や感情）とが調和に達することができるように関与する必要がある」と指摘されている。

エスプタイン (Esptein, S., 1973) は、諸理論家が自己概念と心理的過程について示している立場を考察し、7つのポイントにまとめている。また、わが国の梶田 (梶田, 1988, 1990) は、自己概念を6つの構成要素に分類している。以下それらを示し、自己概念の理解を試みることとする。

エスプタインのまとめ：

- ①自己概念は、広範な概念システムの中に含まれる内的一貫性をもち、階層的に組織化された諸概念から成る。
- ②自己概念は身体的自己、精神的自己、社会的自己といったいくつかの異なる経験的自己を含む。
- ③自己概念は経験に伴って変化するダイナミックな有機的組織で、それは変化を求め、増大する情報量を吸収する傾向を示し、それをとうして成長原理 (growth principle) を明確にする。
- ④自己概念は、経験によって、とくに重要な他者との社会的相互作用によって発達する。
- ⑤人が機能する際には、自己概念の有機的組織が維持されていくことが不可欠である。もしその有機的組織が脅かされると、人は不安を体験し、恐れから自己防衛しようとする。もしこの防衛がうまく行かないとき、ストレスが増し、最終的には完全な解体 (total disorganization) がもたらされる。
- ⑥自己システムのあらゆる局面に関連して自己評価にたいする基本的欲求がある。これと比較すると他のすべての欲求は副次的である。
- ⑦自己概念は少なくとも次の二つの基本的機能をもつ。(①. 自己概念は経験から得たデータの、とくに社会的相互作用を含む経験から得たデータを、行為と反応の系列に組織化する。
②. 自己概念は不安や非難を避け、諸欲求を満足させ助長する)

梶田の6つの自己概念の構成要素：

- ①自己の現状の認識と規定
- ②自己への感情と評価
- ③他者から見られている自己
- ④過去の自己についてのイメージ
- ⑤自己の可能性と将来についてのイメージ
- ⑥自己に関する当為と理想

以上の両者のまとめは、その視点が違うので直接比較することは困難であるが、エスプタイ

ンは、自己概念とは階層的ないくつかの構成要素から成り、他者や環境との相互作用によって形成され発達する有機的な組織 (organization) であり、これが維持されないと根源的な不安が生じるという見解を重視しているようである。

それに対して梶田は、自己の現状の認識と規定と感情が中心となり、それを支える形で「他者から見られている自己」「過去の自己」「自己の可能性と将来、理想」が相対的な位置を占めるとする。そしてどのカテゴリーに属するどの要素が中心的位置を占めるかは個人差が生じるとみている。なお梶田は、自己意識は発達の過程で「即自的」なあり方から「対自的」なあり方に変わっていくという。つまり“自分のことを何も考えないで、無邪気にふるまうことのできる”ある時期から、自分を対象化して概念化してとらえ直して、自分自身を生きていくあり方を余儀なくされると説明している。

以上のように理論家たちの見解を中心として考察しても、自己概念は多次元的な構成要素から成っていて、それぞれは互いに力動性をもつものと理解される。

これまで“自分を見てとらえる”ことを測定するためにあまたの自己概念スケールが開発されている。代表的なものには、「テネシー自己概念スケール (TSCS)」(Fitts, W. H., 1965), 「自尊感情スケール (Rosenberg, M., 1965), 「文章完成テスト (SCT)」(辻, 1966) などがある。当初の自己概念スケールは単一の次元で測定しようとしたものが多かったが、最近では多次元的に自己概念の構成要素をみようとする動きに変わってきていると思われる。アメリカのモンゲ (Monge, R.H., 1973, 1975) は、多次元的な自己概念の構成要素を因子分析によって抽出し、それによりスケールを開発した。

本研究は、青年期の自己概念の多次元的な構成要素を測定することが第一の目的である。そのため、今回上記のモンゲのスケールを採用して、それが日本においても妥当性をもつかどうか検討する。次に、前述のエスプタインがまとめたように、人は自己概念の維持が脅かされると不適応症状を示し、「不安」を体験することが指摘されたが、本研究はそこに焦点をおいて、青年の自己概念の確立の過程における心理的適応のインデックスとして「不安」を測定し、自己概念と適応との関係を検討する。またこうした青年の自己概念の発達におよぼすいろいろな変数の影響要因を探索し、その点からも自己概念の発達と「不安」をめぐる心理的適応との関係を追求することを試みる。

方 法

1. 自己概念尺度の性質

モンゲは自己概念の構成要素を導き、スケールの妥当性を確認するために、二つのかなり大規模な研究をした。はじめは、12才から18才の思春期、前青年期の男女 (male = 1035, Female = 1027) に対して (1973), 次に9才から89才の男女 (male = 1799, female = 2741) を対象として (1975), “私を特徴づける self” (あなた自身に最もよく当てはまるあなたのこと) を評点できる21対の対極をなす形容詞によって構成された7件法のSD法スケールを用い

て実施し、因子分析を行なった。

この21対の対極をなす形容詞については、1962年、スミス (Smith, P.A.A., 1962) が抽出した6因子のうち5因子が選択され、それに基づいて導かれたものである。

モンゲは最初の青少年を対象とした研究において3通りの分析を主因子法による因子分析など一定の手続きによって行い、自己概念の因子パターンが性と年齢間で一致することを見いだした。その研究の線上で、次に思春期から老年期に至るまでのライフスパンに研究を広げ、この因子パターンの安定性を検証し、スケールの妥当性を確認した。

最初の研究から、①「達成／指導力 (Achievement/Leadership)」②「適応性 (Adjustment)」③「適合／社会性 (Congeniality/sociability)」④「男性性／女性性 (Masculinity/Femininity)」と名づけられた4つの因子が自己概念の構成要素として示された。そこで第二の研究では9才から89才の5段階に分けられた各年齢と性のグループから因子を引き出し、因子間の比較をとうして自己概念の基本的構造の類似性を見ようとしたのである (合同係数—coefficients of congruence は、Wrigley & Neuhaus の方法によって、因子間の類似性が計られた)。その結果最も一致していると認められたのは「適合／社会性」と「適応」で、一致度の最も低いのは「女性性／男性性」であった。そして全被験者の分析がなされ、固有値の高い (eigenvalue ≥ 1) 4因子の項目が Varimax 回転後示された。このように第二の研究でも自己概念の因子パターンが、最初の研究と同じように、性と年齢間での一致が見られたのである。以下その4因子による自己概念の構成要素について簡単に検討する。

①第一因子の「達成／指導力」は「機転のきく」「成功した」「先頭に立つ」「鋭い」「優れた」「価値がある」「自信のある」「落ち着いた」「強い」など9項目が含まれ、人が自分自身を能力があり、知性を持ち、率先して行動するように知覚する自己概念とされている。ローゼンクランツら (Rosenkrantz, P. et al., 1968) は、これら形容詞が男性的価値の特質を有するとしたが、それと類似している。これらにたいして対極のものが当てはめられた。それらはいずれもこの第一因子のポジティブな面に対するネガティブな敗北者のイメージを表すものである。

②第二因子は「適応性」といわれ、「満足した」「幸せな」「おっとりした」「気分一新した」「健康な」など5項目である。これらは欲求を充足したホメオスタティックなバランスのとれた自己イメージを表すものと考えられている。また環境との生き生きしたつながりをもつ自分自身のイメージでもあるとされる。反面、どうしようもない欲求不満をもつネガティブな自己像が知覚されるとする。

③第三因子は「適合／社会性」であり、「親切的」「優しい」「素敵な」「良い」「安定した」など5項目がある。それらは社会的な刺激に対してオープンで喜びを感じる自己イメージとされている。再びローゼンクランツが女性的価値の性質を持つ形容詞としたものと類似している。対極のネガティブな形容詞は人間ぎらいの自己イメージを表すものとされた。

④「男性性／女性性」の第四因子は、男女ともその構成要素については一致しているが、男性は「粗野な」「堅い」をポジティブに受け取り、女性は「繊細な」「やわらかい」をポジティブにみていることが示されている。

2. 手続き

調査対象：東京都内にある4つの私立大学生，1028人（共学：18.1%，女子大学と男子大学：71.9%）の1～4回生，男：505人，女：523人から成る。平均年齢は19.7才（SD 1.37），年齢範囲は18～28である。家族構成は親と同居，男：21.8%。女：71.7%，下宿または学生寮，男：75.6%，女：18.6%，その他，男：2.6%，女：9.7%，健康状態は疾病がある者は30%，疾病なしが69.2%であった。

調査尺度：

①自己概念については，上記モンゲの7件法21項目のSDスケールを翻訳し使用した（表1参照）。

Table 1 因子分析 (Varimax 回転)

No.	Item	(Monge's)*	F 1	F 2	F 3	F 4	共通性
4	先頭に立つ—後について行く	(Ac)	.740				.603
1	自信のある—自信のない	(Ac)	.735				.605
3	強い—弱い	(Ac)	.704				.573
9	鋭い—鈍い	(Ac)	.621				.490
15	優れた—劣った	(Ac)	.583				.509
5	落ち着いた—頼りない	(Ac)	.569				.428
20	機転のきく—おろかな	(Ac)	.557				.452
12	価値がある—役に立たない	(Ac)	.555	.464			.613
6	成功した—失敗した	(Ac)	.480	.440			.443
19	満足した—不満な	(Ad)		.790			.681
11	幸せな—さびしい	(Ad)		.785			.671
21	気分一新した—疲れた	(Ad)		.673			.507
10	健康な—加減の悪い	(Ad)		.618			.428
17	安定した—不安定な	(Ad)		.593			.536
13	やさしい—残酷な	(S)			.709		.634
18	親切な—不親切な	(S)			.703		.655
8	粗野な—繊細な	(Mf)			.648		.541
2	良い—悪い	(S)			.526		.474
7	すてきな—ひどい	(S)	.468		.496		.538
14	堅い—柔らかい	(Mf)				.771	.616
16	おっとりした—神経質	(Ad)		.490		.628	.591
説明率 (%)			32.6%	9.8%	7.8%	5.0%	55.2%

F 1 達成・指導性

F 2 適応

F 3 適合。社会性

F 4 その他（説明不可）

*：モンゲの因子は1975年の研究データによる。

②心理的適応については「C.A.S.（不安診断スケールの Cattell, R.B. & Sheier, I.H. の日本版）」（対馬, et al., 1960）を用いた。本スケールは40項目からなり，Q3⁽⁻⁾（自我統制力の欠如），C⁽⁻⁾（自我の弱さ），L（パラノイド傾向），O（罪悪感），Q4（衝動による緊張），の下位尺度から構成されている。テスト項目および構成要素と不安因子の相関は.85～.90で，このテストの

内部的妥当性が認められている。

以上のスケールを含めて質問冊子を作り1989～90年に、各大学における授業時間の一部を使い、集団実施した。所用時間は役20～30分であった。

結 果

①自己概念の構成要素

モンゲの分析と同様に主因子法による因子分析を行い4因子を抽出した。表1. は自己概念の Varimax 回転後の因子負荷を示したものである。4 因子の内、「達成／指導力」「適応」「適合／社会性」がモンゲの各因子を構成している変数とほぼ同じように示された。モンゲの結果と異なった変数は「適合／社会性」のなかに、「粗野な－繊細な」という本来「男性性／女性性」の変数が組み込まれた。したがって本研究では、「男性性／女性性」は確認されず、日本の青年群の自己概念の構成は「達成／指導力」「適応」「適合／社会性」から成っていることが判明した。

②自己概念と他の変数との関係

自己概念に影響を及ぼす変数として、年齢、性、経済状況、大学の種類、疾病の有無、家族構成を用いて重回帰分析を行った（表2.）

Table 2 自己概念に影響を及ぼす変数（重回帰分析）

デモグラフィック 変数 (df)	自己概念 (総得点) (5,962)	適 応 (5,962)	適 合 社会性 (3,964)	達 成 指導性 (3,964)
経済状況	.150***	.166***	.113***	.124***
大学	.117***	.154***	.129***	
疾病	.070*	.118***		
家族構成	.072*			.077*
年齢	.093***	.128***		
性		.075*	-.105**	-.165***
説明率(R-squared)	.054***	.079***	.035***	.056***

* : $p < .05$; ** : $p < .01$; *** : $p < .001$

経済状況：1 '不十分' ↔ 3 '十分'；

大学：1 '共学' 2 '別学(女子大+男子大)'；

疾病：1 '病気あり' 2 '病気なし'；

家族構成：1 '親と別居' 0 '親と同居'；

年齢：暦年齢；

性：1 '男' 2 '女'

自己概念の総得点では、性差を除いたすべての変数が自己概念に寄与していた。また自己概念の各下位尺度においては、家族構成を除いたすべての変数が「適応」に影響していた。しかしながら、「適合／社会性」には経済状況や大学の種類、性に有意差が示され、「達成／指導性」では経済状況、家族構成、性に有意差が示された。

次に、自己概念の下位尺度の内、「適応」「達成／指導性」「適合／社会性」の三つを独立変数

Table 3 自己概念の下位カテゴリーの不安への影響（重回帰分析）

	適 応	適 合 社会性	達 成 指導性	説明率 (R-squared)
Beta	-.511***	.065*	-.151***	
相関	-.556***	-.287***	-.387***	
説明率	.284***	-.019***	.058*	.323***

* : $p < .05$; ** : $p < .01$; *** : $p < .001$

df=3,1013

Beta : Standardized partial regression coefficient

とし、不安診断検査（CAS）の総得点を従属変数とする重回帰分析を行ったのが、表3. である。

不安に対する影響は「適応」が最も強力であった。「適応」と「達成／指導性」の二つの下位尺度は不安に直接影響していたが、「適合／社会性」は「適応」($r = .58^{**}$)と「達成／指導性」($r = .49^{***}$)を介して間接的に影響していることが示された。

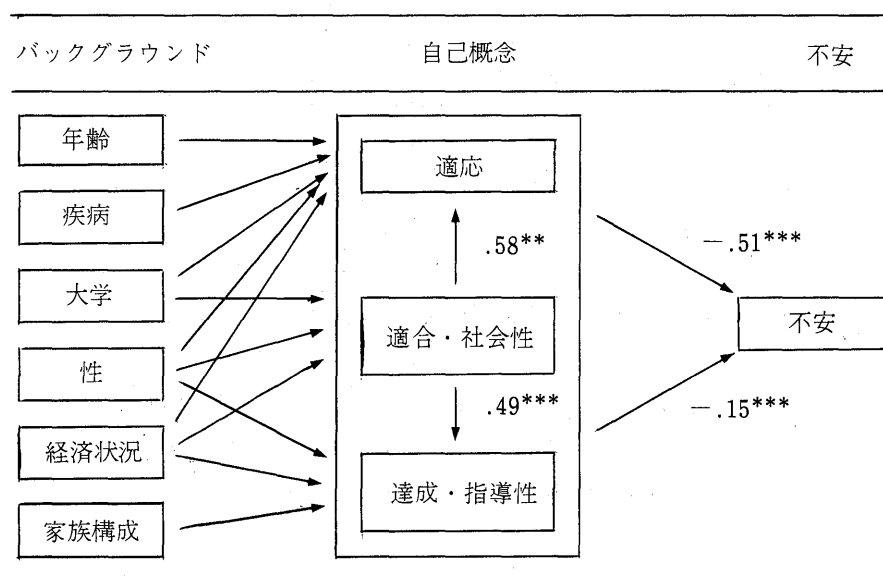
考 察

①本研究の第一目的である青年期の自己概念の構造についての調査は、モンゲとほぼ同じ因子をもつことが確認された。しかし「男性性／女性性」が異なったことは、日米間の文化差を示すものと受けとれる。とくに「粗野な—繊細な (rugged-delicate)」が、男性性／女性性とは反応されず、「適合／社会性」に組み込まれたことは、わが国の青年では、このような人格特徴が対人関係の中で重要なものであることを示唆しており興味深い。

モンゲの研究において、アメリカの青年にとって、「先頭になつ」「優れた」などの自分自身を能力があり積極的に行動する男性的価値をイメージする自己概念（「達成／指導性」）は、男性の方が女性よりもやや早く発達する傾向があるが、「親切」「優しい」などの女性的な自己概念（「適合／社会性」）で特徴づけられるものは、常に女性が上回っていることを示している。しかしモンゲは、男子青年も青年期の後期になると、そうした女性的な自己概念を受け入れるようになると解釈している。また女子も18歳ころになると男性的価値を志向することが把握されている。本研究では、大学生のみを対象としたために、年齢比較は行わず、モンゲのような自己概念の習得過程は検討できなかったが、自己概念の3つの因子が明確にあらわれたことは、本研究の青年男女はすでに自己概念の確立の最終段階に位置していることを示唆している。

本研究では、自己概念とその影響要因について探索したが、自己概念の総得点との関係で性差以外の他の変数の、経済状況、大学、疾病の有無、家族構成、年齢はすべて自己概念の確立に影響をおよぼしていたことが判明した。しかしながら、自己概念の構成要素ごとに影響要因を探ると、それぞれに性は影響していた。以上のことを念頭に置きつつも、本研究ではおおまかには、年齢が高く、健康で、経済状況にもゆとりがあり、親とは離れて住み、大学は男女別

Fig. 1 自己概念と適応との関連性



学に在学している青年男女に自己概念の発達が見られることを示している。男女別学の方が共学より自己概念の発達にポジティブに影響している点については、別の機会に検討する必要があると思われる。

②図1. は、自己概念に影響を及ぼす変数および自己概念と心理的適応との関係の結果をまとめたものである（なお、表2を参照）。

まず自己概念の影響要因となるデモグラフィックな変数との関係について、それぞれ構成要素ごとに考察する。つまり、「適応」における満足した、バランスのとれた自己イメージは、女性であり、年齢が高く、健康で、男女別学大学に在学し、経済状況に余裕のある若者に発達することを示唆している。このように本研究から、わが国では青年期に達した女子は比較的心理的に安定している局面があることを示唆しているが、モンゲの研究では男女とも18歳ころから20歳ころに「適応」が著しく低下することが判明している。これはアメリカの文化が大人になるためにあまりに多くの要求を青年に課することによっても解釈されているが、わが国の場合、女子の多くがこの年齢で未だ両親のもとにいる（本研究では約70%）ことを考えると、そうした環境における守られた安定した「適応」であるのかもしれない。

「適合/社会性」における人間関係や、社会的環境の中でポジティブに反応する自己イメージは、本研究によると、男性で、大学は男女別学で、経済状況にもゆとりのある場合が、その発達に影響しているとみることができる。ところがモンゲの研究では、女子青年のほうがこの達成度が高くなっている。これはアメリカでは社交性という文化的価値が女子に対して重んじられると推測されているが、より興味深い点は、男女とも17, 8歳ころに一時的に低下することである。それは青年期に達して同一性の確立のために、男女ともまわりのことよりも自分自身により関心が向くことによると解釈されている。しかしながら、こうした社会性についての自

己認知は、日本の青年の場合には、本研究によれば男子青年の方がむしろ女子よりも先に獲得することを示している。

「達成／指導性」という自信のある、有能な自己イメージは、本研究では、男子青年のほうが高く、経済状況にも余裕がある場合に表われており、それは家族と離れて住むことが、その確立のためには大切であることが示唆されている。この「達成／指導性」は自己概念の柱ともいえる中心的な構成要素であり、自尊感情に満ちた、自律心に富む、自己推進力を持って行動する自己イメージである。3つの構成要素のうちこれに対してのみ、家族構成が影響しているということは、青年の自己確立にとって両親と離れて住むことは重要な意味を持ち、両親の側からは、いわゆる‘空の巣 (empty nest)’ とよばれるライフサイクルのイベントは必要であることを示唆している。女性のほうがこの「達成／指導性」の発達が低いということは、本研究の女子青年の70%以上が両親のもとで生活していることによるのかもしれない。つまり先に「適応」のところでも考察したように、日本の女子青年は家族の中で比較的安定しているために、男子よりも自己概念の確立がやや後になることを示唆していると思われる。モンゲの研究では「達成／指導性」について、女子は17歳くらいの高校までは、ずっと男子よりもその発達は低いが、18歳から急激に男子のレベルに接近することが確認され、このことは、大学進学や将来の方向の決定などを目の前に直面して、女子も男性的な自律の自己概念を発達させるものと解釈されている。

結局、本研究では、3つの自己概念の構成要素のすべてに対しての発達の影響要因となるものは経済状況である。つまりそうした生活の安定は人格的な成長の過程に必要なことを示唆している。またそれぞれの構成要素の発達には微妙に男女の相違がみられることも判明した。こうした点と類似した先行研究のなかで、アメリカとプエルト・リコの大学生の自己概念の発達と個人的、文化的なデモグラフィックな変数の影響要因との関係について比較研究された結果があるが、プエルト・リコは「家族の所得の地位」に強い相関関係がみられたが、アメリカでは「性」が関係していたことが報告されている。

③図1. でまとめたように、本研究から、自己概念の3つの構成要素と「不安」との関係について考察すると、とくに「適応」と「達成／指導性」が不安と直結しており、また、「適合／社会性」も以上の二つの構成要素にからんで間接的に影響していることが明らかとなり、日本の青年男女の中には自己概念の発達に不適応な面があることを示している。このことを解釈すると、ホメオスタティックなバランスのとれない自分にいららし、高い不安を経験し、自信も持てず、行動力もなく、したがって人ともうまくかかわれない、自己概念の混乱した青年像が浮かびあがる。町沢は、現代日本の青年の未成熟度について、4つの観点を指摘している（町沢、1992）。つまり「セルフ・コントロール」「独立心」「自主性」「他人への配慮」であるが、これらは上記のような自己概念の構成要素に組み込まれうるものと考えられるが、町沢はこのように自己概念を認知しえない未成熟な若者が増えていることを強調している。また、前述したアメリカとプエルト・リコの大学生に対する比較研究では、彼らの自己概念の認知と適応の指標として本研究と同じく不安が用いられ、それは強く関係していることも実証されている。

齊藤は「同一性が混沌化し拡散する不安が人を深層で動かす力には無視できないものがある。それはさまざまな緊張、混乱、麻痺、解体への作用を及ぼす可能性があるため、各人各様の防衛、安定操作を動員した対処が試みられる」(齊藤, 1991)と説明しているが、本研究でも自己概念の発達とともに、ある程度青年期の危機を実証しえたように、この青年期の潜在的、顕在的な不安への対処にはより一層の関心がはらわれるべきであり、臨床心理学の分野からのケアなどにより、不適応からの脱却は青年期における心理的、社会的諸問題解決にとって重要な課題であると思われる。

引用・参考文献

- Blos, P. (1962). *On Adolescence: A Psychoanalytic Interpretation*, The Free Press of Glencoe, Inc., N.Y. (野沢英司訳 1971 青年期の精神医学 誠心書房)
- Cohen, J. (1964). *Behaviour in Uncertainty*. George Allenn & Unwin Ltd. (小野彰夫訳 1968 不安と行動 誠心書房)
- 遠藤辰雄編(1988). *アイデンティティの心理学* ナカニシヤ出版
- Erikson, E.H. (1959). *Identity and The Life Cycle*. International University Press. (小此木啓吾訳 1973 自我同一性 誠心書房)
- Erikson, E.H. (1963). *Childhood and Society* (2nd Ed.) Norton, N.Y. (仁科弥生訳 1977 幼児期と社会 I・II みすず書房)
- Esptein, S. (1973). The self-concept revisited: or a theory of a theory. *American Psychologist*, 28, 404-416.
- Fitts, W.H. (1985). *Tennessee Self-Concept Scale*. Nashville, TN: Counselor Recordings and Tests.
- 梶田毅一(1990). *自己意識の心理学*(第2版) 東京大学出版会
- Lobel, T.E. & Winch, G.L. (1987). Neuroticism, anxiety and psychosocial development. *British Journal of Clinical Psychology*, 25, 63-64
- Lobel, T.E. & Winch, G.L. (1988). Psychosocial development, self-concept, and gender. *Journal of Genetic Psychology*, 149, 405-411.
- 町沢静夫(1992). *成熟できない若者たち* 講談社
- Monge, R.H. (1973). Development trends in factors of adolescent self-concept. *Developmental Psychology*, 8, 382-393.
- Monge, R.H. (1975). Structure of the self-concept from adolescence through old age. *Experimental Aging Research*, 1(2), 281-291.
- 中西信男・鏑幹八郎編(1981). *心理学10 自我・自己 有斐閣双書*
- 中西信男編(1989). *人間形成の心理学* ナカニシヤ出版
- Newman, B.M. & Newman, P.R. (1984). *Development through Life* (3rd Ed.). Richard D.Irwin, Inc. (福富護訳1988 新版 生涯発達心理学 川島書房)
- 小川捷之・斉藤久美子・鏑幹八郎編(1990). *臨床心理学体系 2 パーソナリティ* 金子書房
- 小川捷之・斉藤久美子・鏑幹八郎編(1990). *臨床心理学体系 3 ライフサイクル* 金子書房
- 小此木啓吾 1970. *モラトリアム人間の心理構造* 中央公論社
- Ortiz, N.C. & Campbell, N.J. (1985). Self-concept and anxiety: A comparison of students from Puerto Rico and the United States. *College Student Journal*, Win. Vol. 19 (4), 416-423
- Rogers, C.R. (1951). *Client-centered therapy: its current practice, implication, and theory*, Boston: Houghton Mifflin.
- Rogers, C.R. & Dymond R. (Eds) (1954) *Psychotherapy and personality change*. Chicago: Univ. of

- Chicago Press.(友田不二男編 1967 パースナリティの変化 ロジャス全集13 岩崎学術出版社)
- Rosenberg, M. (1965). Society and the adolescent self-image. Princeton: Princeton University press.
- Rosenkrantz, P., Vogel, S., Bee, H., Broverman, I., & Broverman, D.M. (1968) Sex-role stereotypes and self-concepts in college students. Journal of Consulting and Clinical Psychology, 32, 237-295.
- 齊藤久美子(1991). 不安の心理臨床(こころの科学 40 不安) 日本評論社
- 下仲順子(1988). 老人と人格 川島書店
- Smith, P.A. (1962). A comparison of three sets of rotated factor analytic solutions of self-concept data. Journal of Abnormal and Social Psychology, 64, 326-333.
- 高橋徹編(1991). こころの科学 40 不安 日本評論社
- 鑓幹八郎・山本力・宮下一博編(1984). 自我同一性の展望 ナカニシヤ出版
- 鑓幹八郎・上里一郎編(1982). 自我同一性の病理と臨床 ナカニシヤ出版
- 辻悟(1966). SCT 井村恒郎・懸田克躬・島崎敏樹・井上仁編 心理テスト(異常心理学講座 2) みすず書房
- 対馬忠・辻岡美延・対馬ゆき子(1960). CAS(不安診断検査・日本版) 東京心理株式会社

謝 辞

この研究の調査，データの収集，および論文の作成に当り，助力と助言を頂きました，東京都老人総合研究所，心理学部門，室長，下仲順子先生，及び，主任研究員の中里克治先生に厚く感謝いたします。

(原稿受理 1992年9月14日)